

Alessandro De Francesco

再定義 [ridefinizione]

Translated into Japanese by Keiko Tomii

早朝 ノートを取り囲む部屋を見渡して 首の回転運動に すでに乳児期から目を動かせる可能性に驚く どう表現していいのかわからない要求があった時には 泣くことは実在の問いだった 頭は後ろに揺り動き 手はつかむことを知らなかった

質問を投げかける真実を思考が持たない今この時 真っ暗な闇から見れば 我々に可能な動作を断定するものの多くは 電源の切れた映写機のフィルムだ 最初に与えられた描写と正確には同一ではない状況が起きた 初めは中心にいと信じていた

あらかじめ限定された構造を持たずに ゆっくり
と生育し 濾過機能を有する細胞群に由来する
このことにより一つとして完璧に同じもののない
形状を生成することが可能となる

外敵を察知すると自らの身体を透明な球体になる
まで膨張させ あるいは墨で満たされた自身の窪
みに頭と腕を移動させ 闇に姿をくらますことが
できる

連れて来られた時以来 家に誰もいない時
でさえ 緑の球体の上の毒針とともに 壺の中に
居続ける 斜めの光が横切る 置物に紛れ 我々
の知らない行動をとる 物に逆らって進む

失神は死のリハーサルなのか 我々が自問するよ
うに彼らはしむける 私が振り返る時 箱はまだ
あるのか そして我々自身は
一方で 出発前に廊下を通り抜ける人々の匂い
を感じ 扉の後ろの海を前にして 内側からは虫の
羽のように見える睫毛を閉じ 透明な胎盤の
球体群をスクリーンの中に見る さらに隣に
座った男が呼吸することを 常に覚えているのは
本当なのか 彼にとっては全て筋の通った関係な
のか 背もたれの向こうに 電話の中に
戸の後ろ そしてタンスの中に 階段の下に
砂丘と砂丘の間に 食事を待つ誰かが 本当に
いるのか

点状の光の源は 身体の中で 唯一不透明な部分
眼を隠すのに寄与する生物発光の光の穴だ

成体では機能的な消化システムを欠き 躯幹の細
長い部分の特別な組織に寄生する化学的独立栄養
共生体を介して栄養補給をする
北緯 9 度 50 分 44.7 秒 西経 104 度 17 分 49.3 秒
水深 1000 メートル

ティッシュペーパーを1枚手に取る 2枚重ねの
剥がせる部分を そっと引き抜いた 紙が分断さ
れ倍増されたことを現在確認している

吸盤は粘液に覆われたつるに繋がったランタンでもある 生物発光は神経系により制御される
光波伝播の平均速度は $16.8 \pm 8.8 \text{cm/秒}$ 興奮
は橈骨神経と神経単位網に伝播する 生物発光
の制御カウンターは 0.33 から 0.69 秒間隔

僕らは 夜 家を後にして 庭に入った 黒々と
した樅の木の庭の果ての 車が脇に止まった工場
に向かう砂利道に入り込んだ 横に並んだ
3つの窓は(内部から)激しく照らし出され(内部
を)何も見ることはできなかった 僕らは
歩き続けた 一定の騒音は耳をつんざくほどになっ
た まるで工場と僕らとの間の距離が既に
踏破されたかのように

朝 ベッドの中で君が僕を抱きしめる時 もし
かしたら ひとつの物語 まだ閉じたままの
僕の目に映る可能なことのひとつの形 出来事
の 生起していないイメージとしての

別の場所 ホテルの一室で 窓は本物だと
僕は信じていた まだ暗闇の中で 目覚める
とすぐに 光への接近を妨げていた ある透
明感から離れようと試みていた

不意に侵入する 透明な身体から突き出した曇った目でぐるりと見渡す その存在は可能なことの増大を引き起こす 彼らは鎮静された人生を押し付けたがる とはいえ樅の木は建物の景観を引き立てる それを陰影として表す 夜僕らは家の近くの庭の裏手の小道を車で走り抜けながら幼少期を解放しようとした ボールの色は白く褪せていた あえぐにまかされ 変形した玩具 そのことについて書き記しておく必要があったかもしれない 樅の木の前に留まり

呼吸するのを忘れることがある 道で人混みに埋もれるが 両脇の高速の動きに 不動でたたずむことがあったりする

その時 二人の女が海の前を タンスの中を歩く 年老いた方の女は 夏の中を じっと見つめる 髪の毛を失いつつある 何も言わず 何も望まない 後戻りしないことを選んだ 揺り動きながらも続けることを 透けるような首筋に 娘の腕が回されたことに気付く

我々の中には 色彩が存在し続ける闇のイメージ
が住みついている 実在と一致する この闇の概
念は増殖しない 閉じた目の上を指で押すと瞼と
脳の間には生物発光域が形成される

思考は時として同じ空間の中で異なる外観を帯び
る N次元に共存する数々の物体 原子とバクテ
リアの肉眼での観察 球体状のテーブル 明瞭な
超音波 地球上のその他の知的生命体 だが亡霊
なぜなら神経の行程はそれらを受け入れるよう
にはできていない 外耳は振動せず 網膜は
驚きを感じない

だが我々には本物とは思えない 窓の向こうの
カーテンの襞によって膨らんだ月

そして洗面所のタイルの上に描かれた蠅から遠ざけられた蠅 飛ぶ鳥の影に似せたシールによって透明な障壁を知覚する鳥 彼らは似通っている時にのみ他者を恐れる イメージ あるいはおそらく自身の複製

機械はアクセス・コードをコピーすることを要求する 作業を完遂するには継続の印象が必要だ 人間の存在の局限しうる真実を反対側にいる者に分からせる 不特定の ゆっくりとした連続なぜならキーの上の指(ケーブルではなく ケイ素の閃光でもない)は 暗号化された多量の変動性を0と1にコピーすることができるから

だが手書きのように見える文章でさえ スクリーン上にあり 記され 入力されている 反対側にいる者は別の目的と それを知られまいとする意志を持っているのかもしれない

生活用品のためでなければ 各部屋は空っぽか
もしれない 空白のはずだが 鼓膜が振動を始め
る時 縦断面図は季節の表面を再び記述する
それならば(太陽を)凝視するというのは ある物
体の形状をさまざまに表現することができるはず
の現実を用意することだろうし 空白(は空気で
作られたもの)ではないだろう 滑らかな表面は
縦溝の中に増殖するだろう あるいは穴としての
惑星は しばしばではないにしても 我々に与え
られた見る方法により 中断することなしに